西、山東、山西、河南、河北省の都市遺跡を見學して—」（名古屋大學文學部研究論集一二二、史學四一、一九九五）一〇頁。

（3）河南省文物研究所等「河南淮陽平糧臺龍山文化城址試掘簡報」（文物一九八三—三）二八頁。

（4）淺原達郎「古代國家の出現—殷・西周時代」（永田英正編『アジアの歴史と文化—中國史古代』同朋舍出版、一九九四）。

（5）山東省文物考古研究所等『曲阜魯國故城』（齊魯書社、一九八二）。

（6）拙著『春秋・戰國・秦漢時代の都市の構造と住民の性格』（平成元年度科學研究費研究成果報告書、一九九〇）。

一九九五年九月　東京　汲古書院
A五判　二七六頁＋あとがき一八頁　五五〇〇圓

## 羽田　正編著
## シャルダン『イスファハーン誌』研究

勝藤　猛

『イスファハーン誌』の原著者シャルダン Jean Chardin は、一六四三年一一月一六日、パリに生まれた。ルイ十四世即位の年である。父はユグノー、つまりカルヴァン派の新教徒で、寶石商人であった。ジャンは六五年、商品を持って東方への旅行に出發、翌六六年初め、サファヴィー朝の首都イスファハンに到着し、カプチン修道院を宿とした。

カプチン會の修道士は、その名の起こりである先のとがった帽子をかぶり、ひげは剃らず、裸足で歩いて教えを説いていた。シャルダンは彼らがイスラムの托鉢僧ダルヴィーシュに似ていると見なす。〔本文一六、七五、七六、八二、一〇〇、一二四頁、注№44〕

この會は宗教改革に對抗するカトリック側のアジアにおける布教活動の一部をなす。ただしその活動はおのずとナショナルな性質を帶び、フランス人のカプチン會のほかに、イタリア人によるカルメル會、ポルトガル人によるアウグスティノ會があり、それぞれイスファハンに建物をもっていた。

シャルダンの記述によれば「カプチン會修道士は、サフィー一世〔アッバース大王の孫、在位一六二九～四二〕の治世の初めにペルシアに來て、フランス王〔ルイ十三世〕の推薦狀によってペルシアに受け入れられた。リシュリュー樞機卿の執政のころのことであ

る。」〔本文七三頁〕

カプチン會修道院は、フランス外交代表部といった役割をもっていたようで、ユグノーであるシャルダンがここに出入りするのに差し支えはなかったようである。

シャルダンは六六年六月、アッバース二世（サフィー一世の子、在位一六四二―六七）から王の御用商人の資格をもらい、寶飾品の賣り込みにも成功した。六七年、インドに渡り、六九年に再びペルシアに入り、七〇年五月、パリに歸國した。これが彼の第一回東方旅行である。

シャルダンは翌年八月、第二次旅行に出發、七三年六月二三日、イスファハンに到着、今回もカプチン會修道院に宿を取った。その後、ペルシア各地を商用で歩き、今度はカルメル會の修道院に泊った。こういうこともできたのであろう。七八年初め、インドへ行き、翌年末、乘船し、八〇年八月二七日、ロンドンに入港した。この二回の旅行において、ペルシア滞在は計七年半、その首都にいたのは第一次が一年餘、第二次が二ないし三年である。

シャルダンはロンドンから一旦フランスに戻った。しかし編著者の解題によれば「一六八一年四月、肉親・友人に別れを告げる暇もなく、急いでロンドンに赴き、以後、イギリスに生活の根據を移した。移住の理由は定かでないが、宗教上の問題が考えられる。具體的にはフランスにおけるユグノーへの壓力強化があり、八五年にはナントの勅令〔一五九八年發布、新教徒にある程度の信仰の自由を認めた〕が廢止された。〔イギリスでは大陸での新舊の對立から離れて國教會を設立した。〕シャルダンはロンドンでイギリス東インド會社の株主として、會社の業務を見守り、また亡命して來るユグノーへの援助も怠らず、金持ちの名士として惠まれた半生を送った。一七一三年一月五日、ロンドン近郊の自宅で死去、滿六九歳であった。」〔三七四～三七五頁〕

シャルダンは第一次旅行の際、イスファハンで「オランダの商館長で、ヘルベルト・ド・イェーガーという、非常に學識のある人物と、個人的友情を結んだ。ペルシアを知りそれについてこれまでなされていないような正確で廣範な報告を行いたいという共通の情熱が、私たちを結びつけた。私たちは、費用と勞力を出しあって、首都イスファハンの記述を行うこと、その際、知るに値するものは何一つ省かないことを、申し合わせた。」〔一〇頁〕シャルダンの記事にはこのオランダ人の書いたものが含まれている。

シャルダンの東方旅行記の最初のものは、第二次旅行の記錄で、一六七一年の出發から、七三年六月、イスファハン入りまでを述べたもので、八六年、ロンドンの出版である。

重要なのはその次の著作で、『勳爵士シャルダン殿のペルシア及び東方その他の地への旅行記』と題して、一七一一年、オランダのアムステルダムから發行された。三部から成り、第二部が「ペルシア事情報告」である。三卷本・十卷本の二形態があり、本書のカヴァ裏側の寫眞は前者の卷一の表紙である。

一七三五年、シャルダンの遺稿を入手したオランダの出版社が、四卷の旅行記として刊行した。

この版を底本として、一八一一年に「シャルダンの故國で初めて出版される最良・最高の刊本」という謳い文句で、十卷本がパリにおいて刊行された。

この旅行記の第二部の一章を占めるのが、「ペルシアの都イスフ

アハンの町についての特別な記述」、本書で『イスファハーン誌』と呼ぶものである。解題にいう、「一七・一八世紀にペルシアを訪れたヨーロッパ人旅行者は、多かれ少なかれ、當時の都イスファハンに關する敍述を行っているが、これほど詳しく且つ正確な報告は、他に例を見ない」と。〔三七六頁〕

シャルダンはフランス人畫家を同伴して繪を描かせた〔九一頁、注No.338〕。本文の中に一八葉の繪が載っており、理解を助けてくれる。イスラム教徒による著述が文字だけなのと大いに相違する。

シャルダンはイスファハンの案内の中で、カルメル會修道院の建物に言及している。「これは王のものである大邸宅で、〝王の賓客〟の資格でそこに住むよう、彼らに與えられている。ここは元來、一七世紀の初め、アッバース大王〔在位一五八七～一六二九〕が家族もろとも滅ぼした砲兵隊長の屋敷だった。カルメル會修道士たちは、教皇クレメンス八世の使節という資格で、イスファハンにやって來た。彼らは王に住居を求めた。どこにでも好きなところに選ぶよう、王が言ったのに對し、彼らが選んだのが、この屋敷なのである。」〔七八頁〕

そして一六〇四年六月三〇日附、教皇が三名のカルメル會修道士に託して、アッバース大王に宛てたラテン語の手紙の翻譯が示されている。その文中に「われわれの共通の恐ろしい敵であるトルコ大帝」という表現がある。シャルダンは解説して、「アッバース大王は、教皇がオスマン國家を滅ぼすこと、あるいは少なくとも、その擴大を防ぐことにもっとも關心をもっていると見なしていた」と。〔八〇頁〕

サファヴィー朝とオスマン・トルコが對立していたのはよく知られた事實で、敵の敵は味方であるという論理で、サファヴィー朝はキリスト教世界との連携を企てたのである。

但し、實際にペルシアで活動している宣教師を、シャルダンは嚴しく批判して言う。「彼らの大部分は現地の言葉を習得しない。とくにアウグスティノ會士はそうである。さらに、ペルシアで私が知り合った八〇人以上のうち、現地の學者と議論を戰わすことができるのは、わずか三、四人しかいない。彼らは私に告白して、マホメット教徒を相手に勝ち目はまったくない、と言ったものである。トルコでもインドでも、事態は同じである。」〔八〇～八一頁〕

以下、シャルダンの詳細なイスファハン案内の中、現在、觀光客としても見ることができるものの一につき、羽田氏の詩的表現を引用する。

「王のモスク」の中庭を取り卷く二層のアーチ式回廊や、四つのイーワーン、さらにドームやミナレットまで、眼に入る限りのモスクの壁面は、濃青・淡青・黄を基調としたタイルの精緻な文様で覆い盡くされている。この美しい壁面が、朝のすがすがしい透き通った光と戯れてきらめき、晝の強烈で刺すような光を受けとめてわきたち、夕暮れの柔らかい茜色の光に映えて金色に輝く。それはさながら、光と色が奏でるシンフォニーである。（羽田正著『モスクが語るイスラム史』中公新書二一四頁）

以下、シャルダンだからこそ行って見て書いたことに重點を置いて紹介する。

そのひとつは王の寶物庫である。それは市壁の南に接するカラ・

テベッルク城砦の中の主塔にある。そこに入るための鍵を持っているのは、宮廷財務總監・城砦長官・小武器庫長の三人で、この三人が揃わないと中に入れない。シャルダンは二度入ったことがあるという。そこにあるのは、時計・地球儀・望遠鏡・武器・鏡・裝身具・食器類・衣服など、とくに食器に金製のものがあふれるほどあり、武器の中には金や寶石で飾られた劍も多い。「私の考えではこの寶物は優に數百萬エキュの價値がある。私は金や寶石には目がきくから、贋物を本物と勘違いしたりしない。」

「私はどうしてももう一度言わずにおれないが、世界中のどんな場所でも、これほどの財寶を一個所に集めたところがあるとは思わない。」

「しかし私がほんとうに驚いたのは、これほど豪華で珍稀な細工品の數々を、埃で痛みつけられるままに放置し、永年積み重ねてあるため、碎けて粉々になるに任せていることである。」〔一〇四～一〇八頁〕

この城砦の跡は今は宅地となっており、かつての堀の一部が殘っている。（注No.388）

シャルダンは後宮にも旺盛な關心を示す。その記錄は希少價値が大である。「私はここについてすべてを見たわけではないので、正確に描寫することはできない。しかしそれがどのようなものであるかをわかってもらえるほどには、觀察したと思う。この種の場所には、特別な恩惠による場合のみ、入ることができる。しかもそれはたまたま何か修繕の必要がある時、職人にばけた上でのことである。……後宮で私自身で見た以外に、王宮の宦官や女性たちから、幾度か情報を得た。……宦官であれば誰でも後宮の中に入れるわけではない。白人の若い宦官は、王のために特別に命じられた場合を除いて、決して入らない。年老いた黑人の宦官だけが、女性のいる場所に出入りし、傳言をつたえる役目を果たしている。」

「私は部屋のひとつが見事に飾りつけられているのを見た。備え附けの調度品は、これ以上は想像できないほどに、享樂的に見えた。寢具は立派な絨毯の上に敷かれていた。金や群青〔ラピスラズリ〕の裝飾枠の中の詩句や文章も、あるものは愛について語り、別のものは道德を扱う、というように、樣々な主題についてのものである。」〔五五～五七頁〕

後宮はもちろん現存しない。（注No.175）

ザーヤンデ川の南にアルメニア人地區が今もあり、イスファハンの特色のひとつをなす。これができた經緯を、シャルダンは次のように說明する。

「勇敢で明敏なアッバース大王は、トルコ皇帝の大軍が毎年ペルシア領に攻め込んできては、とりわけアルメニア人の土地に居座り續けているのを見ると、自ら軍勢を率いて、アラクス川に臨むイリヴァン、ナッチヴァン、ジュルファの町々、それに高地アルメニア全土に向かい、これらの地方からすべてのアルメニア住民を立ち退かせ、もれなく連行した。アルメニア人がトルコ人からはペルシア人ほど憎まれておらず、キリスト教徒と宗教を同じくするところから、彼らこそ自國の臣民の中で、トルコやキリスト教國相手の交易にたずさわるのに最適な者と考えて、首都イスファハンに連れ來たったのである。」〔一七一～一七二頁〕

シャルダンは當時「ペルシアであまねく知られていた」〔一三三頁〕宮廷内の抗爭を詳しく述べている。宰相サルタキをめぐる血なまぐさい對立である。以下、彼の敍述からの拔粹：

サルタキは、サフィー一世の治世末期からアッバース二世の初めにかけて、宰相の地位にあった。彼はタブリーズのパン屋の息子で、父は彼をイスファハンへ出稼ぎにやった。彼の友達は男色にふける若者で、彼もこの罪に汚染された。二年たって、彼は王の役人によって、小銃をかつぐ以上の能力のある男と認められ、その書記となった。

彼はある子供を誘拐して色事をさせたという疑いをかけられ、子供の親が王に直訴し、彼は去勢の刑に處せられた。

サルタキはそのために遊蕩が不能となったので、仕事に專念し、十年後には財政にすぐれた手腕を發揮し、いくつかの要職を歷任したあと、一國の宰相にまで出世した。彼は公共の利益のため、自分の主人のため、比類ない熱意を示した。恩惠や職を得るために東方でしばしば使われる贈り物を、彼は拒けた。大臣たちがこの目的のために受け取ったとわかったものはすべて、王の金庫に收めさせた。サフィー王はこの賢明・清廉な宰相に滿足していたが、宰相は政府の大官たちに憎まれていた。

アッバース二世の世の三年目、ギラン知事ダウドは、不法徵稅を宰相にとがめられた。知事は身内である近衞軍將軍ジャニカンの援助を求めた。

王アッバース二世はまだ若く、その母親が後見人として權力を握り、サルタキ宰相と密接な信賴關係をもっていた。

將軍ジャニカンは宰相を殺すことを企て、宰相の敵であることが明らかな中のひとり、砲兵隊長を一味に加えた。彼らは宰相に王命を傳えると稱してその家へ行き、隊長は宰相の體に短劍を突き立てて殺し、その首を切り落とした。ジャニカンは片手でサルタキの首を握り、他の手で拔き身の劍を持ち、王宮へ驅け附け、若い王に向かって首を示した。サルタキはこの時、宰相の位にあること一三年、八〇歲であった。ジャニカンはペルシアの大將軍に昇進し、三萬の兵を指揮下にもち、金貨二萬枚を贈られた。

東方ではどこでも、女性、とりわけ身分の高い女性は、情念を抑えようとは決してせず、いつも激しく興奮する。サルタキは王の母のために莫大な財を集めて贈っていた。

彼女が宰相の死にどれほど怒り狂ったことか。彼女が復讐を計畫したことを、ジャニカンは察知して、彼女を後宮から引きずり出して殺そうと圖った。しかし後宮はペルシア人にとって、侵すべからざる場所であり、目をその入り口に向けるだけで、破廉恥行爲とみなされていた。

神は公平で、ジャニカンの陰謀も相手方にばれた。氣の弱い王は母后にけしかけられてジャニカン處罰を決意し、王宮の中で陰謀者一味を斧で八つ裂きにし、町の外の墓地の一つ穴に投げこんだ。ダウド知事も死刑・財產沒收の刑罰を受けた。

これが事件の概要である。〔一七～二四頁〕

若くなくても、女性が大きな役割を演じ、後宮が舞臺となれば、下々の好奇心をそそるに十分である。剛直の老宰相の悲劇に對する復讐がなされ、庶民は納得したであろう。

注№47にいう、「ペルシア語史料によるかぎり、サルタキは代々續く官僚家系の出身であったと考えられる」と。噂話としてはパン

屋の息子である方が面白いし、文獻としては名門の出とすると格好がつく。またペルシア語文獻に、黒幕たる母后の記事はないと、注№64にある。文獻と噂話の相違を示して興味ある。眞實は神だけが知る。

もうひとつの話は庶民の出世物語である。ハラン・ヴェライエドという聖者の墓は、ペルシア建築の見本のように見事な墓廟であると、シャルダンは言い、そのきっかけとなった石工シェイク・ホセインの物語を述べる。その筋は次のようである。

彼は腕のいい石工であったのに、他の職人たちがあらぬ噂を立て、そのために彼は仕事にありつけなかった。悲しんだ石工は稼いだわずかのお金で蠟燭を一本買い、聖者ハランの墓に祈った「何とぞ私をこの哀れな貧乏暮らしからお救い下さい。」そして自分の村へ歸って行った。

ある日、イスマイル一世（サファヴィー朝創設者）が狩獵に出て、雷雨に遭った。皇后が皆からはぐれて、やっと辿り着いたのが、あの石工の村である。しかし皇后を歡迎する村人は一人もなかった。なぜならペルシアでは、道で王の妻たちに出會うことはおろか、五〇歩の距離に近づくだけで、死刑に値したからである。皇后は泣きながら、石工の家の戸を叩き、大聲で助けを求めた。彼は決心した、いっそこの女性を助け、それが原因で殺されたら、今のみじめな生活から逃れられる、と。そこで彼は皇后を招き入れ、世話は妻と娘にまかせて、自分は家の外に出た。

後日、皇后は宮廷に戻って、このことを王に告げた。石工は王に認められ、才能あり、讀み書きもできたので、建築總監、ついで大臣にまでなった。この幸運はまったくハラン・ヴェライエド聖人のお蔭であると、彼のためにすばらしい墳墓を建てた。それが現在も見ることができるハールーネ・ヴィラーヤトの聖廟である。〔八八～八九頁、注№322〕

石工が讀み書きできることは珍しい。その他いくつもの偶然が重なって出世することができた。確率がいくら低くても、こういう話を庶民は好む。

シャルダンはしばしば「ペルシアでは」「東方では」と、フランスやヨーロッパを基準とする比較文化論を提出している。今までの引用文にも見られたが、なおいくつかを紹介する。

ペルシアでは、血筋の古さはさして有利とならず、あまり考慮されることはない。系圖を保存することはほとんどないし、宮廷で自分の曾祖父の出自を承知している人は十人もいない。〔一五頁〕

注№24は反論していう。「これは事實に反する。ペルシアでは、イスラム世界の他地域と比べると、血統がかなり重視される。」どちらの言い分にも根據がある。これも神の判定に待つ。

ペルシアでは、王女の結婚相手には、大貴族や誰であれ、意欲のある貴族を選んだりはしない。そんなに程度の高い結婚を許せば、王位を奪おうとする欲望を生み出しかねないと恐れるからである。〔一三二頁〕

マハメド・アリーベクは、アッバース一世・サフィー一世・アッバース二世、三代の王の下で、ナージル（宮廷財務總監）であった。ペルシアでは、人の命運は他の國より、よほど變轉きわまりないものであるから、これは例外的幸運というべきである。〔二八頁〕

東方では、財産はきわめて不確實なものである。とりわけ宮廷の人士の場合には、しばしばささいなことで、王が好き勝手に財産や生命を取り上げてしまう。だから基金をより確實なものとするため、次のような方法が取られる。すなわち浴場・バーザール・隊商宿を建て、契約によってその收入を、創建したモスクや學院の維持費にあてる。〔七六～七七頁、注No.38〕

不安定な財産權を少しでも確實にするのがワクフの制度である。ラムトンはいう。「シャルダンによれば、不正な方法で取得した土地を占有していた多くの人々は、その土地をワクフにすることによって、横領財産を所有することからくる道德的非難を免れ、一方では、その土地からの收入の殆どを享受し續けようとした。」(アン・ラムトン著、岡崎正孝譯『ペルシアの地主と農民』一一六頁)。なおこの本の第五章「絕對主義の展開——サファヴィー朝」で、十數箇所にわたってシャルダンを引用している。

ペルシアでは、大貴族の屋敷が完工すると、數日間、そこで王や貴顯を饗應するのが、ごく普通の習慣である。その時に正門が開け放たれる。しかしそうした宴が終わると、永遠に正門は閉ざされてしまう。日本でも同じことが行われている、という話を私は聞いたことがある。〔一四九頁〕

日本についてのシャルダンのただ一箇所の言及である。棟上げの式・宴會のことか。後で正門を閉めるというのはどうなのか。

その他、いくつか氣のついたことを示す。稱號「ミールザー」が、名前の前につくのは知識人、後につくのは王子である。(Browne, E. G., *The Persian Revolution of 1905—1909*, 1910, 1966, pp. xxiv, xxv.) このことはサファヴィー朝にもあてはまるようで、シャルダンの記事からわかる。後者の例はスカンデル・ミールザー〔二五頁〕、サフィー・ミールザー〔四七頁〕、ハムザ・ミールザー〔注No.452〕。前者は多く、二〇人以上あり、身分は醫者・ウラマー・修史官・占星術師・國務卿などである。

「イスファハンの街角のあちこちに、水でいっぱいの大きな素燒きの壺を見かけるだけでなく、〝水運び〟という意味の〝サカブ〟と呼ばれる人が、とくに夏に、水がいっぱい入った大きな革袋を背負い、手に茶碗を持って、通りがかりの人々すべてに飲み水を提供するため、通りを行き來する。」〔三八頁〕

サカブはアラビア語 saqqā'，「水運び人」と、注No.113にいう。素燒きの壺や、羊の革袋は、中の水が少しずつ泌み出て氣化熱を奪うから、水は冷たく保たれる、という說明が本文か注に欲しかった。サカブとb音が加わるのは、水 āb からの連想か。

「後宮の女たちはカジャヴェという搖り籠のようなものの中に入って運ばれる。駱駝がこれを左右振り分け狀にひとつずつ附ける。」〔一二三頁〕注No.442はこれを疑問視するが、本文のままでよい。圖45もそれを示す。シャルダンは實物を見て人に聞いて書いたはずである。

本書は、文獻博搜と實態調査の兩面からなされた勞作である。構成は、譯文篇一八四頁(底本はパリ版、第七～八卷)、注釋篇のほか、資料篇として、地圖三四、繪一三、寫眞(一九九六年三月、編著者撮影)として、カラー一六、白黑一四八が收められている。學問的價値がとくに高いのは、注釋篇で、九三頁を占め、五八三項目

に及ぶ。その史料として、ペルシア語の年代記・詩人傳・地方史、ならびに同時代の西洋人による旅行記を驅使していることを、高く評價したい。評者は一九七二年の夏、このサファヴィー朝首都に數日滯在して、歩き回ったことがある。その時のことを思いだしながら、本書を樂しく讀ませてもらっている。

一九九六年三月　東京大學出版會
B五判　四三六頁　二二六六〇圓